

# 聖堂献堂六〇周年記念特集



献堂時（1959年）の聖堂正面



【特集】聖堂献堂六〇周年記念特集①

本学の聖堂は、今年で献堂からちょうど六十年を迎えました。キリスト教文化研究所では、昨年より聖堂の建築、彫像、用具等に関する包括的な研究に着手しました。今回は、現在進行中の調査の中から、献堂式に関することから中心にご紹介します。

本学の聖堂（聖マグダレナ・ソフィア聖堂）は、竹腰健造<sup>〔1〕</sup>の設計になる本学の初期の建造物の一つであり、五期にわたった建築計画の最後に、二号館、修道院などと共に建設されました。一九五八年に竣工し、翌一九五九年一月二十四日に、土井大司教の司式により献堂式が行われました。これまで、大学では、建築計画の詳細や献堂式の詳しい様子についての資料は、ごく限られたものしか確認されていませんでした。今回、改めて学内のみならず、聖心会、建築に関わった日建設計、清水建設などに調査を依頼した結果、幾つかの新資料が発見されました。現在、これら資料に基づいて、さらに建築や設計に関する調査研究、彫像の製作に関する調査などを進めています。

本号では、新たに確認された資料の中から、聖心会アメリカ・カナダ管区アーカイブズから提供された献堂式に関する詳細な報告書の訳文と、本学所蔵資料にあった献堂式ミサの説教文（和文・英文）を収録しました。また、建築に関する調査として、祭壇ならびに祭壇周辺の聖域で用いられている天然大理石に関する調査報告を掲

載しています。その他の調査研究についても、今後まとまり次第、ご報告する予定です。

註

(1) 竹腰健造(一八八八年―一九八一年)は、金沢生まれの建築家。第一高等学校、東京帝国大学工科大学建築科を卒業後、英国に留学し、建築や美術を学ぶ。住友総本店に入社し、建築業務に従事したのち独立し、住友財閥系の建築家として活躍した。戦前の建造物で残存するものとしては、住友ビルディング(一九二九年)、大阪証券取引所(一九三五年)などが有名。一九四七年に公職追放を受けるが、一九五〇年に復帰。本学の建築に関わったのは、日建設計工務株式会社時代で、きっかけは、聖心会のマザー・ブリットなどと出会って、深い感銘を受けたからだとされる(竹腰健造『幽泉自叙』創元社、一九八〇年、二五一―二五四頁)。東京の聖心女子学院本館(一九五六)、小林聖心女子学院聖堂(一九六五)の建築にも携わっている。

## 献堂式報告書<sup>(1)</sup>

一九五九年一月二十四日 聖心〔女子〕大学、渋谷、東京

私たちの新しい聖堂の祝別

「ああ万軍の主よ、あなたの幕屋は慕わしい。」（詩編八四の二）<sup>(2)</sup>

ついにその日がやってきました。私たちが長く、長く待ちこんでいた日、一月二十四日です。職人の方々が、何日も夜通し働いて、あらゆるものに最後の仕上げをほどこしてくださいました。修道院全体が喜びと期待の空気に満たされていました。私たちの多くは、心の中でうれし涙を流していました。そして幾人かは、実際に泣いておりました。それはいまでも聞こえています。でもなぜ？誰か知らない者があつたでしょうか？この日、私たちの主なる神がその新たなお住まいにお入りになるといふことを。これまでのものよりも、はるかに、偉大なる神にふさわしい幕屋にお入りになるのです。その祝別のためにおいで下さったのは、親愛なる土井大司教閣下<sup>(3)</sup>、その秘書の方々など随行者、ロス司教様<sup>(4)</sup>、上智大学理事長ルーメル神父様<sup>(5)</sup>です。司祭は総勢八名、それに侍者数

名でした。

輝かしい晴天の日でした。私たちのマザー・ヴィカー<sup>(6)</sup>、顧問の方々、三光町の修道女たちの一団、オーストラリアから最近来日したばかりのシスター・ウィスター<sup>(7)</sup>に加えて、私たちの喜びの輪に加わったのは、学生の保護者数百名、大学、インターナショナル・スクール、三光町の卒業生、本学の在學生、高校生、そして忘れてはならないのは、この立派な聖堂の設計や建築に関わった方々の代表でした。全員が聖堂に着席したとき、列席者は、なんと千百人に達していました。

でも、少しお話を急ぎすぎてしまいました。私たちは、まだ聖堂の外にいます。献堂式が始まったのは九時半でした。まずはじめに、大司教様が、随行者の方々に伴われて進まれ、たつぷりと聖水をお使いになって、建物の外壁を祝別されました。それが終わると、聖堂の入口ホールにお入りになる支度をされました。祭壇にも他のどこにも装飾は一切施されていませんでした。入口ホールでは、他の修道会の会員やお客様、学生たちが、大司教様をお待ちしていました。ここでも、大司教様は祝福をお与えになり、階段に並んだ学生聖歌隊によって、聖歌が歌われ、諸聖人への連禱が唱えられ、祈願が唱えられました。そして、聖堂が、聖マグダレナ・ソフィアに献堂されたのもここでした。<sup>(8)</sup>

これら一連の儀式が終わると、正面扉が開かれ、大司教様が聖堂に入れ、マザーの方々、司祭・修道者、他の会の修道女、お客様、学生たちが続きました。聖歌隊は、美しい大きな階上席に着きました。

でも、大きな中央扉が開いたときに、私たちの目の前に現れたのはなんとすばらしい光景だったでしょう。それを描き出すには、私の貧弱な筆力よりはるかに優れた技量が必要だったでしょう。それは、天国のひとかけら、

いや、大きなかけらでした。しかも、すべてできあがった形で、地上にこぼれおちたわけではなく、何ヶ月にもわたる困難で入念な仕事と重ねられた祈りによって建設されたのです。その純粹さ、シンプルさ、壮大さは、初めて目にした瞬間から現在に至るまで、言葉ではどうも言い尽くせないものでした。聖堂は、クリーム色と白色、様々な色調のアイボリーを基調とし、祭壇の柱にはピンク色、三つの廊の床にはさらに様々な色が使われています。祭壇の卓と後壁と天蓋、祭壇下の石段、聖体拝領台とその前の石段はすべて大理石で、大学や姉妹校に娘や姪が在籍している日本の大理石王の寄贈によるものです。三つの廊の床は、精妙なテラゾー<sup>(12)</sup>でできています。祭壇上の中央を占める私たちの最愛の（モンマルトルの）<sup>(13)</sup>みこころの御像はクリーム色で、その背後はアーチ型の金色のモザイク壁になっています。両側廊に続く聖堂の両脇には、同じ色の聖母像と聖ヨセフ像が石の台座に載っています。三つの御像は、いずれも長崎のフランススコ会の彫刻家の作品です。右奥には、大きな訪問者用の礼拝堂があり、聖域に面しています。その反対側、聖域のすぐ外には、とてもすてきな告解所と聖具室があります。聖堂の両サイドには、修道女のための十分な数の歌隊席（両側に各十五席）があり、その外側には、聖堂と同じ奥行き側の側廊があります。現在は、側廊には椅子は設置されていませんが、卒業式など特別な場合に参列者があふれた際には、椅子を運び入れることもできます。歌隊席の上には、大きな長いアーチ型の窓があり、その上にさらに、小さな三つの窓——丸窓一つと三角形の窓が二つ——があります。階上席は、とにかく見事なもので、八段から十段の長い階段があつて、オルガン用の台座<sup>(16)</sup>に続いています。ここから、学生たちの美しい歌声が晴れやかな音楽を奏で、「クリストゥス・ヴインチト」<sup>(17)</sup>や他の讚美歌と「マニファイカト」<sup>(18)</sup>がミサの間、そしてミサの後も歌われました。忘れていましたが、聖堂のコンクリート製の穹窿天井を支える巨大なコンクリート

の柱のことも触れておかねばなりません。これこそ、コンクリート技術の傑作と言うべきものです。

ところで、大司教様と司祭の方々が聖堂に入場したところに戻りましょう。大司教様は、中央通路を進みながらすべてのものを祝別され、その間中、聖歌隊が聖歌を歌い続けました。大司教様が、祭壇まで到達して、着席されると、ルーメル神父様が進み出て、大きなはっきりとした声で、日本語の素晴らしいお説教をされました。中でも、神父様は、ニューマン枢機卿の言葉を引用し、宗教こそ学問の中の学問であり、大学教育の中心を占めなければならぬこと、この聖堂は、大学の中心とみなされなければならないとお話になられたのです。神父様のお説教の間に、司祭と侍者の手によって静かに肅々と、祭壇が見事な赤い薔薇の花と燭台で美しく飾りつけられてゆきました。お説教が終わると、大司教様は着衣して祭壇に臨まれ、聖堂の守護聖人、私たちの聖マグダレナ・ソフィアのミサが始まったのです。きわめて多くの人々、少なくとも四百人が祭壇に進み出て、聖体拝領を受けました。この瞬間、私たちの幾人かの脳裏を横切ったのは、かつて三光町で日曜のミサの時ですら、拝領を受ける人がほんの一握りしかいなかった頃のことでした。

ミサ聖祭が終わわり、マニフィカトが歌い終えられると、大司教様と司祭方、建築家や施工業者の皆様はパーラー<sup>(19)</sup>に行つて、朝食を取られました。残りのお客様はすべて、新しくできたインターナショナル・スクールの食堂<sup>(20)</sup>いっぱい<sup>(19)</sup>に広がって、軽食を取られました。皆が大声で、興奮して聖堂の美しさを讃えていました。

でも、ここまででほぼ正午となり、レヴァレンド・マザー・ヴィカーとシスター・ウイスターを残して、三光町のマザーズとシスターズはお帰りになり、渋谷の共同体も食堂に引き下がって、そこでようやく、その日はじめてレヴァレンド・マザー・ヴィカーにご挨拶申し上げました。マザーは、「今日こそ主が造られた日<sup>(21)</sup>」という



言葉で、談話の許可をお与えになりました。夕食後すぐ、私たちはマリアンホールに赴き、マザー・ヴィカーにお別れを告げ、それから聖堂で、すべての善い賜物、とりわけ、最高の素敵な賜物である私たちの精妙な聖堂の与え手である神への感謝のうちに、心を込めて、聖務日課を唱えたのです。

この報告をお聞きになる皆様には、親愛なる本学の学生たちと姉妹校の生徒たち、そして特に、日々この聖堂で行われるミサに、ヴェールをかぶらずに与っている者たちのために小さな祈りをささげてくださるようお願いいたします（ヴェールをかぶらないということは、洗礼を受けていないということです）。また、設計者や建設者や多くの支援者の方々のためにもお祈りをお願いします。この方々には、私たちの唯一の真なる神のための素晴らしい住まいを建設するにあたり大変にお世話になりました。残念なことに、この方々は、神を知りません。でも、一杯の冷たい水でも報いることを忘れない神は、神への奉仕のために働いた人々を、必ずや、みこころを知り、愛することへと導きたもうと私たちは信じています。

そしてもちろんのこと、私たちは最も深い感謝を、私たちのレヴァレンド・マザー・ジェネラル、レヴァレンド・マザー・ベンジガー、<sup>(24)</sup> デイーニュ・メール・ドウ・ジャム、<sup>(25)</sup> そして、親愛なるレヴァレンド・マザー・ヴィカーにお捧げいたします。皆様の関心と励ましが相まって、今日、私たちの夢が実現したのですから。（加藤和哉訳）

註

- (1) この報告書は、聖心会アメリカ・カナダ管区アーカイブズより提供を受け、同アーカイブズの許可を受けて、翻訳掲載するものである。原文は英文タイプ。執筆者名は、記載がなく不明であるが、当時の日本の聖心会所

- 属の修道者であると推定される。翻訳にあたっては、聖心会アーキヴィストの堀口委希子氏に、内容及び訳語のチェックをお願いした。ただし、翻訳の責任は訳者にある。また、聖心会では当時、マザー（歌隊修道女）とシスター（助修女）の区別があり、これは一九六七年にシスターに統一されたが、本稿は歴史的文書であることに鑑み、そのままとしている。また、聖心会員の経歴については、堀口氏、ならびにアメリカ・カナダ管区、オーストラリア・ニュージーランド管区などから情報をご提供いただいた。
- (2) 聖書協会共同訳「万軍の主よ、あなたのいますところは どれほど愛されていることでしょう。」
- (3) 土井辰雄（一八九二—一九七〇）一九三八年に、初代の日本人大司教として叙階。一九六〇年には、教皇ヨハネ二十三世により、日本人初の枢機卿に任ぜられた。
- (4) ヨハネス・ロス (Johannes Peter Franziskus Ross, S.J. 一八七五—一九六九) イエズス会士。ドイツから来日し、一九二八年から四〇年まで広島教区長(司教)を務めた。
- (5) クラウス・ルーメル (Klaus Lühmer 一九一六—二〇一一) イエズス会士。一九三七年にドイツから来日。上智大学教授、理事長(在職一九五七—六五/一九八七—九二)を務めた。
- (6) 「レヴァレンド (reverend)」は修道院長などの尊称。当時の聖心会は「総長補佐区 (vicariate)」に分かれており、その長が「スーパーリア・ヴィカー (superior vicar)」（総長補佐区長）であり、呼び名としては「ヴィカー」が用いられた。
- (7) この当時は、日本と韓国を含む「東洋総長補佐区」のヴィカーは、ブリジット・キオ (Brigid Keogh 一九〇九—二〇〇七) が務めていた。マザー・キオは、第二次世界大戦後にアメリカから来日し、戦後復興期、並びに第二ヴァチカン公会議後の変革期の聖心会並びに聖心女子学院のために尽力した。一九五四年から一九七一年までヴィカーと同時に聖心女子学院理事長を務めている。
- (8) ジョーン・ウイスター (Joan Wister 一九二五—二〇一八) 一九五九年にオーストラリアから来日し、一九七三年まで主に東京の聖心女子学院やインターナショナル・スクール等で教えた後、帰国した。
- (9) 本学聖堂の正式名称は、「聖マダレナ・ソフィア聖堂」であり、この名称は、一九六七年頃までの『大学要覧』等に散見される。

- (9) 中央の「身廊 (nave)」とその両側の「側廊 (aisle)」の入り口。
- (10) 聖堂の内陣（祭壇のある聖域）と外陣（信徒席）の間の仕切り。第二ヴァチカン公会議後の典礼改革以前は、この前にひざまずいて、聖体拝領を受けていた。
- (11) 清水建設株式会社所蔵の資料（工事竣工報告書）に、取引先として矢橋大理石の記載があるが、寄贈の詳細に関する記録は確認されていない。大理石については、後掲の大理石鑑定報告を参照のこと。
- (12) 大理石の石片や粉末をモルタルやセメントなどで固めて磨き上げた人造大理石材。本学では聖堂以外にも、一号館、リアンホール、二号館などの床や壁に用いられている。
- (13) みこころの像については (Montmartre) と添えられている。両手を横に大きく広げ、胸に「みこころ (心臓)」が描かれたイエスの像で。パリのモンマルトルのサクレ・クール寺院の祭壇天井にあるモザイク壁画のイエス像をモチーフとしたものであると考えられる（特集扉写真参照）。
- (14) みこころの像は、一九六五年頃に祭壇後壁が現在のモザイクタイルに変更された際に取り外され、その後は聖堂とリアンホールをつなぐ廊下に設置されていたが、二〇一一年の東日本大震災の後、カトリック麻布教会に寄贈され、同教会内に現存する。
- (15) 長崎のコンベツアル・フランシスコ修道会（聖母の騎士会）の修道院内で聖像製作を行っていた彫刻家の作品ではないかと推定されているが、未確認である。
- (16) 階上席の最上部は一般にパイプオルガンなどが設置される場所であるが、実際に設置計画があったかどうかは確認されていない。
- (17) 「クリストゥス・ヴィンチト (キリストは勝利する)」は、カトリック聖歌六二五番。教皇を讃える歌で、今でも教皇の着座式ミサなどで用いられている。
- (18) 「マニフィカト」「我が心、主を崇め (Magnificat anima mea Dominum)」という聖母マリアの祈り（ルカ福音書一の四六―五五）に基づく伝統的な聖歌。
- (19) 「パーラー (parlor)」は、修道院や学校では、訪問客などを迎える談話室のことで、ここではいまでもリアンホール一階に名をとどめる「ブルー・パーラー」か「グリーン・パーラー」を指すものであろう。

- (20) 現在の二号館は、当初、インターナショナル・スクールの校舎だった。
- (21) 詩篇一一八の二四。聖書協会共同訳「今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう。」
- (22) マタイ福音書一〇の四二。聖書協会共同訳「はつきり言っておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」
- (23) 「ジュネフル」は、修道会の最高責任者「総長 (Superior General)」の呼称。当時の総長は、ザビーネ・ドウ・ヴァロン (Sabine de Valon 在職一九五八・六七) である。第二ヴァチカン公会議後の修道会の変革の先頭に立った。
- (24) ウルスラ・ベンジガー (Ursula Benziger)。当時は、ローマの聖心会本部で、総長補佐の一人として日本を担当していた。
- (25) マルグリット・ドウ・ジャム (Marguerite de James)。聖心会本部の総会計を務め、日本に対する経済的な援助も担当していた。フランス人であることから「メール (Mère)」と呼ばれているが、英語の「マザー (Mother)」と同じである。「ディーニユ (Digne)」も英語の「レヴァレンド」と同等のフランス語。

## 献堂式説教

以下は、本学の大学アーカイブズ準備室所蔵の二資料を書き起こしたものである。和文は手書きで、原稿用紙（四〇〇字詰め）五枚のもの、英文はタイプで三枚になるものである。これらの文書の出所等について大学側の記録はこれまで未発見であり、内容的に聖堂の献堂に対する祝辞であることから、献堂式のものであると推定されていたが、確証はなかった。

今回の調査により、日本の聖心会所蔵の会務日誌等、並びに、聖心会のアメリカ・カナダ管区アーカイブズ所蔵の献堂式の報告書（前掲）から、ルーメル師が説教を行なったことが確認された。また、前掲の報告書では、説教は日本語で行われ、宗教が諸学問の要であり、聖堂は大学の中心と見なされるべきだというニューマンの言葉が引用されたとされていることから、これが当日の説教によるものであることはほぼ間違いない。ただし、説教とは言っても、ミサ中のもではなく、ミサに先立って行われたものである。

【和文】<sup>1</sup>

聖心女子大学新聖堂祝別式に當つて

ルーメル神父様

聖心大学のこの聖堂が出来上がりまして、今日この献堂式を行ないます事は、私達にとつて最も喜ばしい事でもあります。この立派な建築が出来上がるのに協力を下さいました聖心のマザース、先生方を中心に、関係者の各位、或は日本に、或は外国に於て、そのために色々と経済的にも援助を下された方々、又、設計者、技師、又、これが成立つ為に汗をかいて働いた労働者までも、私達はここで本当にその尽力に感謝を表す次第であります。

大学の中に聖堂が出来上がりました事は、特殊な意義を有するものであります。大学と聖堂との間に一体どのような関係があるのでしょうか。一つこの機会に私達は大学教育の理念について反省してみましよう。そうすれば、大学と聖堂との相互関係が直ちに分るでありましよう。

そこで私は一つの対照を以て大学教育の理念を説明してみましよう。ほぼ百年前、科学の世紀又は唯物論の世紀とも呼ばれる十九世紀の半ば頃に、西洋教育史上に於て重大な位置を占めている二つの大作が発表されました。一つは、ハーバート・スペンサーの書いた『教育論』<sup>(2)</sup>であり、もう一つは、後程カトリック教会の中で枢機卿の地位を与えられたジョン・ヘンリー・ニューマンの『大学の理念』<sup>(4)</sup>という本であります。

前者について申しますと、それは我々の若い世代を教育する為に一体何を最も重要視するかについて述べて居ります<sup>(6)</sup>。確かに教育という事は、若い人に知識を授ける事であります。知識と云えばしかし非常に範圍の広いも

ので、選択をしなければやりきれないものであります。文字通り一切の知識を与える事は不可能であります。では、適当に選択するとすると、どういう風な基準のもとになされるべきものでしょうか。スペンサー<sup>(7)</sup>は、人間に最も有益な、最も役に立つ、そういうような知識を選んで教える事とし、生活に様々な分野を調べてそれを大きく五つに分け、それぞれに最も必要な知識は何ぞやと考えました<sup>(8)</sup>。一つ、人間の自己保存、それから職業生活、家庭生活、社会生活等を行う為に必要な知識、最後に趣味や娯楽の生活を行う為に最も必要な知識として、それは自然科学の知識であるとの結論を下しました。人間を育てる為に、人間に生きる糧を与え、他人との間も円滑に行く為に自然科学の知識が必要であり、そういう意味に於いて、哲学や宗教の知識も或は役立つものであるかも知れないとし、ひとえに自然科学の知識が人類をして明るい将来に向って進ましめるものと考えました<sup>(9)</sup>。

さて、ニューマンは、当時アイルランドによれば、そこにカトリックの大学を設立するという重大な仕事にとりかかっています。そこで自分の大学に対する考え方を発表しました。しかし当時彼の理念を理解する者はなく、四・五年たっても大学は創立されませんでした<sup>(10)</sup>。しかしながら、この困難にもめげず、この大学についての正しい理念を述べた著作を世に発表したのです。これによると、彼はユニヴァーサル・ノレッジ即ち一切の知識、一般的知識を若い世代に与え、普及させる事が教育であるとし、その一切の知識の中で最も大切なものとして神学をあげました。神学は、凡ての存在の源であり絶対者であるところの神に関する学問でありますから、もし神が存在するとすれば、凡ゆる学問の基礎であり、第一のものであるはずです。もし仮に神が存在しないとすれば一切の学問は空想にすぎないものであります。この結論は、神に対する学問、即ち神学、云いかえれば、はつきりとした精神的な生活理念こそ、凡ゆる学問の基礎でなければならぬという事です。

近代の諸大学を見ると、——あるいは時代錯誤と云われるかも知れませんが、——欧州の大学をまわってみますと、そしてその歴史を辿ってみると、一体大学はどういうふうな、どこから発生したかがわかります。オックスフォードには幾つものカレッジがあり、中には八百年の歴史を持つものもありますが、夫々の中心をなしているものは何であるかという点、それは聖堂であります。欧州の一流の大学は全て教会の歴史を与えられて発足しているのであります。それを我々は残念乍ら忘れていくかも知れません。

大学の中心となるのは聖堂であります。そして又大学の課程の中心となるのは神学であります。その意味で今この聖心大学の聖堂の献堂式を行う事は、私達としては、大学教育の基礎が出来上ることとして、何より羨しい限りであります。ではこの大学の聖堂の献堂式の終りに、この最も重要な意義を持つ聖堂が、大学の中心として、その使命を立派に果たす事を祈り乍ら、簡単ではございますが私のあいさつとさせて頂きます。

#### 註

(1) 和文の文書は、原稿用紙に記録されていること、「ルーメル神父様」と記載されていること、日本語としてはやや生硬で、文意が通らないところもあるところ、縮めくりの挨拶などから推測すると、当日の説教を元に、何らかの記録や報告のために作成されたものであるのかもしれない。英文の文書についても作成の経緯は不明である。ただし、日本語の原稿と異同はあるものの、英文の方が全体として文意が整っており、こちらがルーメル自身の手になる元原稿であった可能性もある。参考までに、和文の意味が通りにくいところ、英文と大きく異なるところについて、英文に基づく邦訳を注記した。詳細は、以下の英語原文を参照されたい。

(2) ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 一八二〇—一九〇三) は、社会進化論などで知られるイギリスの哲



学者、社会学者。

- (3) 『教育論』(Education: Intellectual, Moral, and Physical, New York, 1860. ただし、以下の英文ではタイトルは *Essays on Education* となっている)。これは、原著に関連する幾つかの論考を加えて Everyman's Library の一卷として、出版された Herbert Spencer, *Essays on Education and Kindred Subjects*. Intro. by C. W. Eliot, London, 1911) によると思われる。『教育論』は一八八〇年に邦訳され(尺振八訳『斯氏教育論』、明治期以降の日本の社会に大きな影響を与えた。副題にもある「知的」「道徳的」「身体的」の三分類は、現在でも日本の教育で掲げられる「知育」「徳育」「体育」の起源であるとされる(現代の訳としては、『知育・徳育・体育論』世界教育学選集五〇、三笠乙彦訳、明治図書出版、一九六九年がある)。
- (4) ジョン・ヘンリー・ニューマン(John Henry Newman 一八〇一—一八九〇)は、英国の神学者・教会聖職者。イングランド国教会の司祭からカトリックに改宗し、枢機卿となった。
- (5) 『大学の理念』(*The Idea of a University*, 1852, 1858)。本文でも触れられているように、アイルランドのカトリック大学の学長就任にあたって、行った一連の講義をまとめたものである。ここで言及されているのは、「普遍的知識」の統合の要となる神学について論じる前半の講義である。邦訳は二種類あるが、いずれも、「一般教養」を論じた後半だけしか訳出されていないことは、日本におけるこの著作の受容を考える点で興味深い。(ニューマン『大学の理念』増野正衛訳、弘文堂、一九四九年。J・H・ニューマン『大学で何を学ぶか』ピーター・ミルワード編、田中秀人訳、大修館書店、一九八三年)。
- (6) 英文「前者によると、若い世代の教育において、最も重要なことは『知識』です。」
- (7) 以下、この段落の終わりまで、スペンサーの紹介は、英文では、以下の通り。「スペンサーは、私たちの日常生活において最も有用な知識を選ばなければならないと書いています。彼は、生活の様々な領域を五つに分け、それぞれに必要な知識を考案しました。一つ目は、自己保存のための知識であり、次の三つは、職業生活、家庭生活、社会生活のための知識です。そして、最後にあらゆる種類の娯楽のための知識です。スペンサーは、これら全ての知識において、自然科学の知識が最も重要であると結論づけています。彼によれば、自然科学の知識が若い世代に与えられてこそ、人類に輝かしい未来が開かれるであろうというのです。」

(8) Cf. Spencer, *op. cit.*, Chap. 1.

(9) 「人間を育てる為に……知れないとし」の一節は文意がやや通らず、また英文にない。また、スペンサーの『教育論』の内容にも合致しないと思われる。

(10) アイルランドのカトリック大学は、一八五四年に、ニューマンを学長として開学したが、様々な反対にあつて、当初の計画は実現せず、ニューマンは一八五七年に失意のうちにアイルランドを去った。ミルワードによれば、失敗の根本的な理由は、ニューマンを招請したにも関わらず、アイルランドの司教たちの中に、国教会からの改宗者であるという彼の経歴に疑念を抱いた者がいたからだという。ニューマン『大学で何を学ぶか』(前掲書) v—vii 頁参照。

(11) 英文「彼によると、教育とは、若い人々に『普遍的知識』を与えることなのです」。ここでは、スペンサーが、教育の目的を、単純に「知識 (knowledge)」、具体的には、生活の諸分野に対応した有用な諸知識、中でも自然科学の知識としたのに対して、ニューマンが「普遍的な知識 (universal knowledge)」を目的として掲げたことが対比されている。

It is a very great joy for all of us to have the opening ceremony of this new chapel of the Sacred Heart University today. First we would like to express our hearty gratitude for the cooperation and contribution of the Mothers, Sensei, all the people concerned either in Japan or abroad, and for the great work of the architect, contractors, engineers, and all the workmen who laboured strenuously from morn till night.

I think it has a special meaning that a chapel is completed in the university. But what relation is there between the university and the chapel? If we reconsider the idea of college education, that relation will at once be realized. Now, I will explain the idea of college education by a contrast.

About one hundred years ago, in the middle of the nineteenth century, which is often called the scientific or the materialistic century, two works, which take an important part in the history of education in Europe, were published. One is the “Essays on Education” by Herbert Spencer, and the other is “The Idea of a University” by John Henry Newman, who later was given the title of Cardinal in the Catholic Church.

The former takes ‘knowledge’ as the most important thing in education of the young generation. True, education is to give knowledge to the young. However, knowledge covers so wide a range that we cannot but choose a part of it. It is impossible to give all knowledge. In order to choose properly, what standard shall we take? Spencer writes that we have to choose the most useful knowledge in our daily life. He divided various fields of life into five and thought out the most necessary knowledge for each of them. One is the knowledge necessary for self-protection, and the next three are those for occupational life, domestic life and social life, and the last one is that for any kind of amusement. Spencer concludes that knowledge of natural science is the most important of all these. He says that a glorious future will open for

man kind, if only scientific knowledge is given to the young generation.

At the time that Newman was called to Ireland and began the great work of establishing a Catholic university there, and with that great programme in mind, he expressed his idea of a university. In fact, however, practically nobody understood his idea and consequently the university was not established even after four or five years. For all that, Newman published his great work, “The Idea of a University”, to the world, which is really a collection of his lectures on the most correct idea of the university. According to him, education is to give ‘universal knowledge’ to young people. What does it contain and what is the most important thing? He said that theology is the first and the most important of all studies, for it concerns God, the Source of all that exists, God, the Absolute. It is the basis of all the learning, if God exists. If God were not to exist, then it were nothing but a dream. In conclusion, the study of God, theology and religion, in other words, an absolute spiritual idea must be the basis of a university.

If we look back on the history of the universities in Europe, we come to know their origin. Most of the big universities in Europe began from a church. Oxford University has many colleges, and among them are some that are more than eight hundred years old. But the point is, what has been the centre of each college is the chapel. Unfortunately, many have forgotten that.

The centre of the courses of a university must be theology, so that the chapel must be the centre of the whole college. Therefore, it is a great event that this new chapel has been completed in this University. It must be the basis of true college education. In the end, we pray that this chapel may fulfill its great mission as the centre of this University.

#### 註

- (1) 著者名などの記載はない。1枚目の欄外に1959という書き込みがあるほか、数カ所、冠詞など微細な修正の書き入れがある。ここでは、それらの修正に従い、また、一部明らかな誤記も訂正した。

## 聖心女子大学聖堂の大理石について

乾 睦子

聖心女子大学の聖堂は、竹腰健造の設計で一九五八年に竣工し一九五九年（昭和三四年）一月二四日に献堂式が行われた。この建物の石工事は（現在の）矢橋大理石株式会社が請け負っていて、聖堂の祭壇、内陣とホワイエに今では入手困難になってしまった貴重な大理石が使われている。今回調査した結果、四種類の大理石石材を認めることができたので、本稿でそれらの大理石について報告する。

大理石が多く使われていたのは聖堂のホワイエ（玄関ホール）の床と、聖堂内の内陣付近である。目視で推定できる範囲で、イタリヤ産の「ネンブプロザート」と「ポテチーノ」、茨城県産の「水戸寒水石」、山口県産の「霰」の四種類の銘柄が認められた。以下にそれぞれの石材の使用箇所と概要を述べる。

なお、本稿のタイトルでは「大理石」という言葉を用いたが、建築石材業界で慣習的に「大理石」と呼ばれているものの中に、学術的には大理石に当てはまらない岩石も多いことを注記しておきたい。このため、以下の説明においては「石灰岩」という名称も一部用いている。石灰岩とは、主に方解石（炭酸カルシウム）からなる堆積岩のことで、炭酸カルシウムでできた殻をもつ生物の死骸などが海底に積もってできたものが多い。従って、

石灰岩には貝殻やサンゴの化石が残っていることがよくある。一方、大理石とは、石灰岩が地中の温度や圧力で結晶し直すことによりより大きな結晶の集合体となったものである。結晶ひとつひとつがより大きく透明になることによって岩石の見た目は白っぽく、磨くと光沢が出やすくなったものが本来の大理石である。

聖堂ホワイエの床には淡紅色く淡黄褐色の石材が用いられており、丸みのある独特の模様が印象的である(図一、図二)。祭壇を支える柱のようなデザインの部分(図七)にも同じ模様の石材が使われている。この模様はイタリア産の「ネンプロロザート」という石灰岩に特徴的なものである。ネンプロロザートは国内に大理石が輸入され始めたかなり初期の頃から用いられていた石材で、昭和初期頃までの首都圏の近代建築物には多くの使用例がある(全国建築石材工業会 2003)。日本橋三越本店、国立科学博物館などに見ることができる。このホワイエの床に用いられた石材は方形のタイル状に成形されたものではなく、径数十センチメートル程度までの不規則な形の塊(レキ)である。多数の石灰岩レキをモルタルで固め、表面を平滑に磨いてレキの断面を見せている。モルタル部分にも淡紅色がつけられていて全体の色合いが調和している(図二の右上と左下に斜めに入っているピンク色の部分がモルタル部。写真中央の大部分を占めるのがネンプロロザート)。全体を見回しても方形に切られた目地がない(図一)ため、おそらくホワイエの床全体が一体であり、施工がすべてこの現場で行われたのではないかと推測できる。現在の石工事はほとんどが加工場で仕上げて現場で取り付ける形であり、人件費の関係もあってこのような工法はほぼ採用されないため、工法から見ても貴重な例であると言えるであろう。

聖堂内の内陣への石段に用いられている石材は、ページュ色を基調とし褐色の細い筋がギザギザ模様を描いている(図三、図四)。これは、ネンプロロザートと同じく第二次世界大戦前から多く輸入され用いられているイタ

リア産石灰岩「ボテチーノ」に特徴的な模様である（全国建築石材工業会2003）。ボテチーノは控えめな色合いと高級感からよく用いられ、例えば明治生命館で見ることができる。この聖堂内では、説教壇、聖体櫃台座、洗礼盤などにも同じボテチーノが認められた。

内陣と身廊を隔てる最初の段の上には、白大理石の柵が設置されている（図五）。祭壇に上がる段石も同じ石材である（図六）。細粒で白色くクリーム色の地の色合いと、緑色く褐色の筋が入るパターンから、この石材はおそらく茨城県北部産の「水戸寒水石」と推測される。水戸寒水石は、山口県美祢市産白大理石「薄雲」などと並び、一時期は日本を代表する白大理石のひとつとされていた銘柄である。真弓山を中心とした、日立市と常陸太田市にまたがる地域に石灰石（岩石としては石灰岩）鉱山があり、主にセメント工業などの産業界向けに採掘されているが、採掘された石のうち色が白いものが寒水石と呼ばれ、建築石材や工芸品の材料として出荷されていた。粒度は比較的細かく肉眼には粒が目立たない滑らかな外観であり、工芸品にはこのような細粒石材の方が向くと言われている。第二次世界大戦前までの方が多く使用例が知られていて、国会議事堂、東京都庭園美術館（旧朝香宮邸）などに使用されている（工藤ほか1995、乾2013）。戦後は産出が減ったと考えられるが、聖心女子大学の聖堂と同時期に読売会館（一九五七年竣工）にも使用されている（木村2018）。現在も産業界石灰石の採掘は続けられているが石材用は新たに採掘されてはいないとのこと、貴重な石材である。今回の調査では、産地側でこの聖堂の建設時期に出荷した記録が見つからなかった（木村2018）ため、水戸寒水石である確証は今のところ得られていない。しかし、外観は水戸寒水石の特徴とよく合うことから、在庫を使って施工した可能性があると考えている。

祭壇の天板には粗粒な白大理石が使用されている（図七）。これは山口県美祢市産の「霰（アラレ）」である（矢橋 2018）。近づくかなくても方解石の粒子が目に見える程度に大きく再結晶しており、また青灰色のパターンが入ることが特徴である（図八）。美祢市秋吉台周辺の石灰岩台地では、明治時代後半から昭和中期にかけて、「霰」「薄雲」など粒度の異なる一連の白大理石のほか、多様な色・柄の石灰岩・大理石が建築石材として採掘されていた（乾 2016）。国内の大理石産地で最後まで継続的な生産を続けていたのは美祢市である。近年はほとんど採掘されていないが、この霰は現在でも石材として採掘することが可能で、文化財の改修などで特に必要がある時には採掘されるということである。霰は日本橋三越本店などに使用されている。

第二次世界大戦後の建築物も竣工後半世紀を超えるものが増えてきて、改修や文化財としての評価のプロセスがこれから始まることになる。将来の東京に残したい建築物を正しく評価するためにも、使われている建材ひとつひとつを記録しておくことが大変重要になる。聖心女子大学の聖堂も間違いなくそのような建築物のひとつであり、本稿の報告がわずかな貢献となれば幸いである。

#### 謝辞

本調査の機会を与えてくださった聖心女子大学 加藤和哉氏に厚く感謝します。この調査は科学研究費補助金（課題番号17H02008）の助成を受けています。矢橋修太郎氏には各種石材の鑑定と工事の経緯について、木村幸裕氏には水戸寒水石の生産について様々なことをご教示いただきました。



参考文献

- 乾睦子 (2013) 歴史的建造物に見られる国産建築石材の調査——東京都庭園美術館——。国士館大学理工学部紀要 6, 127-133.
- 乾睦子 (2016) 山口県美祢地域における近代大理石産業の歴史と現状。国士館大学理工学部紀要 9, 71-76.
- 木村幸裕 (2018) 私信
- 工藤晃、牛来正夫、大森昌衛、中井均 (1999) 「議事堂の石」新日本出版社、158頁
- 全国建築石材工業会 (2003) 「地球素材」284頁
- 矢橋修太郎 (2018) 私信





図1. ホワイエの床（ネンブプロザート）

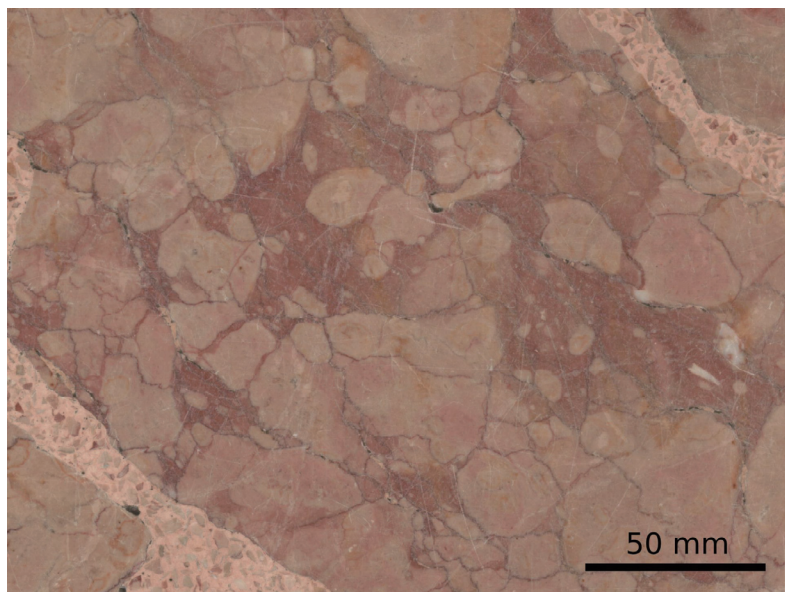


図2. ネンブプロザート（右上と左下のピンク色の太い筋はモルタル部）



図3. 内陣への段石（ボテチーノ）

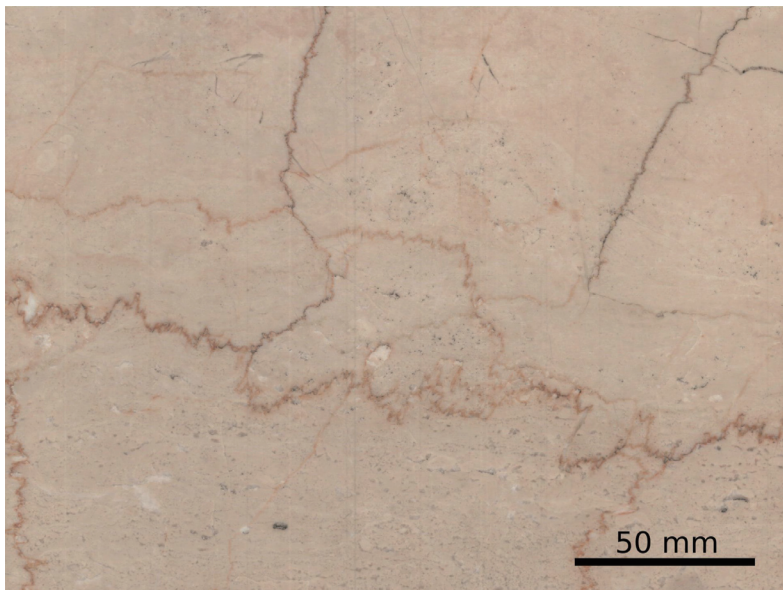


図4. ボテチーノ



図5. 内陣への段上の柵（水戸寒水石）



図6. 祭壇への段石（水戸寒水石）



図7. 祭壇の天板（霰）

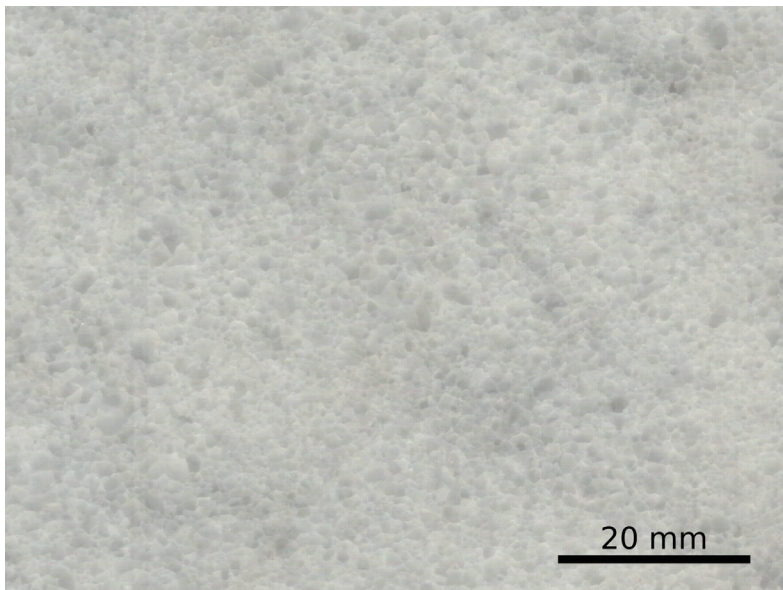


図8. 霰